

～子どもの心と身体の成長支援ネットワークのためのチャリティー・コンサート～

ストラディヴァリウス の 響きき

2014

6.24 (火)

よみうり大手町ホール

6.25 (水)

サントリーホール

Ray Chen, violin

Danjulo Ishizaka, cello

Akira Eguchi, piano

Masahiko Enkoji, conductor

Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

Stradivarius

ごあいさつ

読売新聞社

このたびは、日本音楽財団の特別協力、日本財団の協力を得まして、「ストラディヴァリウスの響き」と題する2つのコンサートを開催できますことを、大変嬉しく思います。

ストラディヴァリウスは、製作当時より今日に至るまで、その完成度と比類なき響きにより、最高峰の弦楽器として、世界の演奏家、楽器製作家、音楽愛好家、楽器収集家などから特別な地位を与えられてきました。その楽器が、歴史的遺産としてのみならず、今日まで保全され、21世紀に生きる私たちも、楽器の奏でる美しい音色を楽しむことができることは、大変な幸運といえます。しかしそれは単なる偶然などではなく、日本音楽財団がストラディヴァリウスを収集・保有し、厳しく適切な管理によって楽器を守り、世界で活躍する若い演奏家に楽器を貸与するという、地道な事業を続けてこられたことが、大きく寄与していることは言うまでもありません。

読売新聞社は、こうして守られてきたストラディヴァリウスのすばらしさを、より多くの方々に知っていただくため、日本音楽財団の全面協力のもと、財団が楽器を貸与している演奏家によるチャリティー・コンサートを、2008年、2012年と開催してきました。

そして今回は、ヴァイオリンのレイ・チェンさん、チェロの石坂団十郎さんが、読売新聞東京本社内に今年オープンしたばかりのよみうり大手町ホールで演奏していただきます。みなさまには、501席という、室内楽に適した親密な音空間の中で、ストラディヴァリウスの響きに包まれるという特別な体験を、心ゆくまでご堪能いただきたいと思います。

また、サントリーホール公演では、ソリストのお二人が、読売グループが世界に誇るオーケストラ、読売日本交響楽団と共演し、チャイコフスキーの名曲ばかりを演奏するという、心躍るプログラムが実現します。ストラディヴァリウスが、読響のサウンドと響き合う「出会い」が楽しい演奏会となるでしょう。

なお、これら2公演の収益の一部は、東日本大震災で被災した子どもたちにキャンプ体験を提供する「子どもの心と身体の成長支援ネットワーク」へのチャリティーとさせていただきます。みなさまのご厚意に心より感謝を申し上げます。

ご来場くださいましたみなさまにとって、「ストラディヴァリウスの響き」公演が特別な思い出となりますよう、願ってやみません。どうぞ最後まで、ゆつくりとお楽しみください。

子どもの心と身体の成長支援ネットワーク

～遊びを通じた子どもたちの心と身体のリフレッシュ～

会長 古川 貞二郎

東日本大震災で被災した子どもたちに、将来にわたって深い傷とならないよう継続的な心の支援を行うべく、母子保健・福祉に取り組んできた社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会が中心となり、医療、心理、教育といった各団体に呼びかけ、「子どもの心と身体の成長支援ネットワーク」を設立しました。

このネットワークは、子どもたちの心と身体のスこやかな成長を医学面、心理面、青少年育成面から支援することを目的とした事業を展開しています。

それぞれの団体の特性を生かし、このネットワークは運営されています。

医学的支援	－医師、看護師
心理的支援	－心理士、チャイルドライフスペシャリスト、 ホスピタルプレイスペシャリスト
青少年育成・教育的支援	－YMCA、ボーイスカウト、ガールスカウト
運営上の支援	－各企業、団体

私たちネットワーク活動のメインは、年に2回夏と冬に福島県相双地域の方を招待するリフレッシュキャンプです。

今回ご支援いただいた資金は、今年度開催される2つのキャンプに使わせていただきます。

第8回～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!

今年8月4日～7日、栃木県那須塩原市にあるボーイスカウト日本連盟那須野営場で開催されるキャンプには、相双地域の小学1年生から6年生までのお子さん約50名を招待する予定です。このキャンプでは、子ども5-6名に対して2-3名のリーダーがついて生活を共にします。クラフト、ネイチャーゲーム、野外料理等の体験を行います。

第9回～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!

来年3月には、静岡県御殿場市にある日本YMCA同盟東山荘で2泊3日の親子キャンプを開催します。相双地域の約10-15家族を招待し、3日間富士山の麓で遊び尽くします。雪遊び、キャンプファイヤー、親子別プログラムなど。子ども、そして親御さんもリフレッシュしてもらえるような内容となっています。



2014年6月24日(火) 19:00 よみうり大手町ホール
24 June (Tue) 19:00 Yomiuri Otemachi Hall

プログラム Program

カミーユ・サン＝サーンス Camille Saint-Saëns (1835-1921)

「序奏とロンド・カプリチオーソ」イ短調 作品28

"Introduction and Rondo Capriccioso" in A minor, Op.28

*

オットリーノ・レスピーギ Ottorino Respighi (1879-1936)

「アダージョと変奏」作品133 (チェロとピアノ版)

"Adagio with variations" for Cello and Piano, P.133

*

アルテュール・オネゲル Arthur Honegger (1892-1955)

ヴァイオリンとチェロのためのソナチネ ホ短調 作品80

Sonatine for Violin and Cello, H80

I. Allegro II. Andante III. Allegro

*

ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル＝ヨハン・ハルヴオルセン編

George Frideric Händel (1685-1759)-Johan Halvorsen (1864-1935)

パッサカリア ト短調 (ヴァイオリンとチェロ版)

Passacaglia in G minor for Violin and Cello

原曲：ヘンデル チェンバロ組曲 第7番 ト短調 第6楽章 パッサカリア

after Harpsichord Suite No.7, VI. Passacaglia by G. F. Händel

Intermission

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー Pyotr Ilyich Tchaikovsky (1840-1893)

ピアノ三重奏曲 イ短調 作品50「偉大な芸術家の思い出に」

Piano Trio A minor, Op.50 "In memory of a great artist"

I. Pezzo elegiaco. Moderato assai

IIa. Tema con variazioni. Andante con moto

IIb. Variazione finale e coda. Allegro risoluto e con fuoco-Andante con moto

2014年6月25日(水) 19:00 サントリーホール
25 June (Wed) 19:00 Suntory Hall

オール・チャイコフスキー・プログラム
Pyotr Ilyich Tchaikovsky (1840-1893)

「エフゲニー・オネーギン」より ポロネーズ 作品24
Polonaise from "Eugene Onegin", Op.24 (1878)

*

「懐かしい土地の思い出」より
第3楽章 “メロディー” & 第2楽章 “スケルツォ”
“Souvenir d'un lieu cher”, Op.42 (1878)
III. “Melody” & II. “Scherzo”

編曲：アレクサンドル・グラズノフ *Arr. Alexander Glazunov*

*

ロココ風の主題による変奏曲 イ長調 作品33
Variations on a Rococo Theme in A major, Op.33 (1877)

Intermission

アンダンテ・カンタービレ (チェロと弦楽オーケストラのための)
Andante cantabile for Cello and String Orchestra (1871)

*

「6つの小品」より “ノクターン” 作品19-4 (チェロ、オーケストラ版)
“Nocturne” from “6 Pieces” for Cello and Orchestra, Op.19-4 (1873)

*

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35
Violin Concerto in D major, Op.35 (1878)

I. *Allegro moderato*

II. *Canzonetta : Andante*

III. *Finale : Allegro vivacissimo*

レイ・チェン *Ray Chen, Violin*

24日・25日出演

ストラディヴァリウス 1715年製ヴァイオリン「ヨアヒム」 *Stradivarius 1715 Violin "Joachim"*

1989年、台湾で生まれ、オーストラリアで育った。15歳でカーティス音楽院入学を許可され、アーロン・ロザンドに師事した。2008年ユーディ・メニューイン国際コンクール、2009年ベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクール、2008-09年国際ヤング・コンサート・アーティスト・オーディションにて優勝を飾る。2011年、ソニー・クラシカルより世界各地で発売されたデビューアルバム「ヴィルトゥオーゾ」は音楽専門誌や大手新聞紙で称賛され、また、同年のドイツ・エコー・クラシック・アワードを受賞した。2012年12月、ノーベル賞受賞者とスウェーデン王室が出席したノーベル賞コンサートでは、最年少出演のソリストとして、クリストフ・エツェンバッハ指揮ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団と共演し、その模様はテレビで放映された。近年の活躍はめざましく、ラヴィニア音楽祭、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団と共演したシュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭で大喝采を受けた。2012-2013年のシーズンは、ウィグモアホールでのデビューリサイタル、ルツェルン音楽祭への初出演の他、リツカルド・シャイー指揮ゲヴァントハウス管弦楽団との共演を果たした。2014年1月、モーツァルトのコンチェルトとソナタをクリストフ・エツェンバッハとの共演で収録したCDを発売した。



©Chris Dunlop

石坂 団十郎 *Danjulo Ishizaka, Cello*

24日・25日出演

ストラディヴァリウス 1730年製チェロ「フォイアマン」 *Stradivarius 1730 Cello "Feuermann"*

1979年、ドイツで日本人の父とドイツ人の母の下に生まれる。4歳でチェロを始め、ケルンでハンス・クリスチャン・シュヴァイカーに師事した後、ベルリンのハンス・アイスラー音楽大学でボリス・ベルガメンシコフに師事。1998年ガスパール・カサド国際チェロ・コンクール、2001年ミュンヘン国際音楽コンクール・チェロ部門で優勝し、2002年には、第1回エマヌエル・フォイアマン・コンクールでグランプリを獲得。2003年、クシシュトフ・ペンデレツキ指揮ウィーン交響楽団との共演が世界に羽ばたく契機となり、フランクフルト放送交響楽団、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽

団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団などの著名なオーケストラと共演するとともに、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ、ギドン・クレーメル、クリストフ・ポツペンといった一流演奏家とも共演している。2005年にソニー・クラシカルより発売されたデビューCDは「ヤング・アーティスト・オブ・ザ・イヤー」のカテゴリーで2006年ドイツ・エコー・クラシック・アワードを受賞。2012年12月には、彼の目覚ましい活躍とクラシック音楽界への貢献が顕彰され、斎藤秀雄メモリアル基金賞を受賞した。2011年より、ドレスデンのカール・マリア・フォン・ヴェーバー音楽大学にて教鞭を執っている。



©Marco Borggreve

江口 玲 Akira Eguchi, Piano

24日出演



©Rikimaru Hotta

東京藝術大学作曲科、ジュリアード音楽院ピアノ科大学院修士課程及びプロフェッショナルスタディを修了。ピアノをハーバート・ステッシン、外山準、金沢明子、伴奏法をサミュエル・サンダース他に師事。1986年ヴィニアフスキー国際ヴァイオリン・コンクールでシュヴァイツァー賞(最優秀伴奏者賞)を、1992年にはジュリアードから権威あるウィリアム・ペチャック賞を受賞。これまでにカーネギーホールをはじめ一流のホールで演奏を行っている。その抜きん出た演奏は、ホワイトハウスにてアイザック・スターンによりクリントン大統領に紹介された。2010年秋に発売された最新アルバム「Dear Chopin」は、レコード芸術誌から特選盤に選ばれた。2011年5月までニューヨーク市立大学ブルックリン校にて教鞭を執る。2006年より洗足学園音楽大学大学院客員教授を務める他、2011年4月より東京藝術大学ピアノ科准教授に就任。

円光寺 雅彦 Masahiko Enkoji, Conductor

25日出演



©三浦興一

東京生まれ。桐朋学園大学指揮科卒業。指揮を斎藤秀雄、ピアノを井口愛子の各氏に師事。ウィーン国立音楽大学に留学し、オトマール・スウィトナーに師事。国内では東京フィルハーモニー交響楽団指揮者、仙台フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者、札幌交響楽団正指揮者を歴任。他に、NHK交響楽団、読売日本交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団をはじめ、日本の各オーケストラに客演し、着実に活動範囲を広げている。海外でも、スメタナホールにてブラハ交響楽団の定期演奏会に客演したのをはじめ、BBC ウェールズ交響楽団、ドミトリー・キタエンコからの招きによりノルウェーのベルゲン・フィルハーモニー管弦楽団、フランス・ブルターニュ

管弦楽団に客演し、それぞれの地で、その深い音楽性と適確な指揮で多くの聴衆を魅了した。国際的指揮者として現在最も期待されている指揮者である。名古屋フィルハーモニー交響楽団正指揮者、桐朋学園大学院大学特別招聘教授。

読売日本交響楽団 Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

25日出演

読売日本交響楽団は1962年、日本のオーケストラ音楽の振興と普及のために読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビのグループ3社を母体に設立された。創立以来、世界的な巨匠を指揮台に招くとともに、世界の名だたるソリストと共演を重ねている。現在、常任指揮者をシルヴァン・カンブルランが務め、名誉顧問には高円宮妃久子殿下をお迎えしている。東京・赤坂のサントリーホールでの定期演奏会を軸に7つのシ

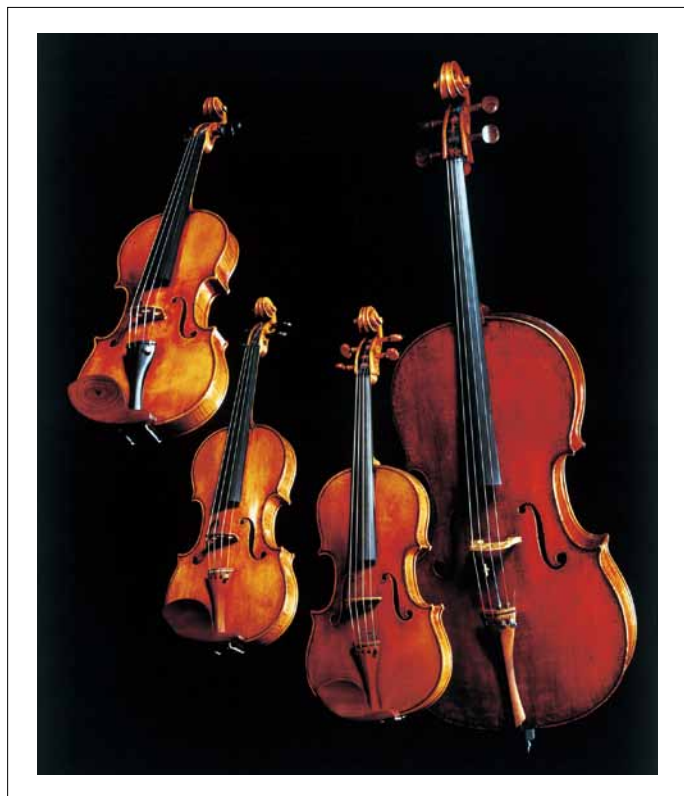


©堀田力丸

リーズの演奏会を開催。知られざる作品から親しみやすい名曲まで、充実した内容で聴衆を魅了している。こうした活動のほか、社会貢献活動として、公益財団法人「正力厚生会」のがん患者助成事業に協力する「ハートフル・コンサート」を続けるとともに、小中学校での「フレンドシップ・コンサート」、中規模ホールにアンサンブルを届ける地域密着型の「サロン・コンサート」など、クラシック音楽のすそ野拡大に地道な努力を続けている。

ホームページ <http://yomikyoku.or.jp/>

日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION



Stradivarius Paganini Quartet

ごあいさつ

会長 小林 實



日本音楽財団は、1974年3月に日本における音楽文化の振興と普及に寄与することを目的として設立され、2012年4月から公益財団法人となりました。創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献のため、弦楽器名器の貸与事業を実施しています。

現在は世界最高クラスの弦楽器20挺を保有し、国籍を問わず一流の演奏家や若手有望演奏家に無償で貸与しています。さらに、これら世界の文化遺産ともいわれる名器の保守・保全に関しては、次世代に継承するための管理者としての大きな責務を負っていることを自覚し、最大限の努力を払っています。

また、演奏会を日本国内外で開催し、世界中の方々に名器の音色に触れる機会を提供しています。とりわけ10挺以上のストラディヴァリウスとその貸与者が一堂に会する演奏会は、世界的にも稀なチャリティ・コンサートとして話題になるとともに、チケット売上金は開催地の音楽振興・福祉等のために使っています。

日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的なご支援により実施されています。

About Nippon Music Foundation

Makoto Kobayashi, Chairman

Nippon Music Foundation was established in March 1974 with the objective to "enhance music culture" in Japan. In 1994, the Foundation started the "Instrument Loan Project" through which the Foundation has strived to make universal contributions by loaning the top quality stringed instruments.

The Foundation now acts as a custodian of the 20 finest stringed instruments, and loans them gratis to internationally-active musicians regardless of their nationalities.

The Foundation is committed to preserving and maintaining these masterpiece stringed instruments often regarded as world's cultural assets, so that they can be inherited and enjoyed by future generations.

The Foundation organizes benefit concerts worldwide using more than 10 Stradivarius instruments played by the recipients. These concerts offer unique opportunities for classical music lovers to fully enjoy the timbre of the superb stringed instruments. The proceeds are donated to local organizations to be used for projects to promote classical music and other worthy cause.

The Foundation's activities are made possible by the generous support of The Nippon Foundation.

日本音楽財団の活動

理事長 塩見 和子



貸与事業を始めたきっかけ

日本財団の笹川陽平会長は長年、「日本はいろいろな分野で援助をしているが、文化の分野ではあまり援助していないので、何かそちらの方面でも援助できないか。」ということを考えておられました。音楽家たち、特にクラシックの音楽家に「今、音楽の分野でいちばん大変なのはどんなことでしょうか。」と聞いてみると、いつも「弦楽器の値段が高く、とても演奏家が個人レベルでは手に入れるのが大変なので、そういう分野で援助をして頂けたら大変ありがたい。」という答えが返ってきたそうです。そのような経緯があって、日本音楽財団に私は招かれ、楽器を購入し貸与する事業をスタートさせることになりました。

「バガニーニ・クアルテット」の購入

弦楽器コレクターの最大の夢であるストラディヴァリウスのクアルテットを最初に購入することが出来たのは本当に幸運でした。クアルテットは、ヴァイオリン2挺、ヴィオラ1挺、チェロ1挺というセットですが、中でも10挺程度しか製作されていないヴィオラを集めるのはほとんど不可能なのです。財団が弦楽器を購入しようと調査を始めたときに最初に入ってきた情報が、希少な「バガニーニ・クアルテット」でした。ワシントンにあるコーコラン美術館は彫刻と絵画で有名な美術館ですが、なぜか篤志家から寄贈されたクアルテットを2セット所有しており、その一つが「バガニーニ・クアルテット」でした。現在日本音楽財団は、クアルテットを含めてストラディヴァリウスが18挺、テル・ジェスが2挺、計20挺の楽器を保有しています。購入当初より東京クアルテットに長年貸与していた「バガニーニ・クアルテット」は、現在ハーゲン・クアルテットに貸与しています。

誰に貸与するかは楽器貸与委員会が決定

日本音楽財団には楽器貸与委員会があります。委員会は8名で構成され、委員長は指揮者のロリン・マゼール氏に当初より就任して頂いています。(貸与委員のリストは、53ページをご覧ください。)この委員会では、書類審査の他、オーディションを行うなどして貸与者を決定しています。そのほか、1997年よりベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクールの優勝者に副賞として次のコンクールまでストラディヴァリウス1708年製「ハギンス」を貸与しています。演奏家のポップ・ステップ・ジャンプの成長の過程で最後のジャンプをされる方に貸与することによって、それを踏み台としてさらに大きくグローバルに成長して頂きたいというのが、日本音楽財団の考えです。ですから貸与するだけに留まらず、その演奏家がどう成長されていくかを見守ることが重要だと考えていますので、コンサートも企画しています。

楽器のメンテナンスは、管理者として財団が管理

メンテナンスや修理、それに保険も財団が払っています。メンテナンスと保険のための予算は年間5,000万円ほどです。修理保全代くらいは借りている方が払うべきだと言われる方もおられますが、財団が保有しているクラスの楽器は、世界的文化遺産なので、財団にはどういう修理をどこで誰がやったかという記録を残しておく責任があると思います。貸与者には3カ月に1回、財団が指定した楽器商でのコンディション・チェックを義務付けています。さらに年に1回は総合的なチェックをしており、実際に楽器の状態がどうであるかをつねにモニターしています。楽器商から請求書とともに届くコンディション・レポートは管理者である財団にとって、もっとも重要な楽器に関する書類です。

楽器貸与終了の難しさ

楽器を貸与して一番難しいのは、いつ貸与を終了し、楽器を返却してもらうかということです。財団ですから永代貸与というわけにはいかず、いつかは返して頂かなくてはなりません。演奏家してみれば貸与が終わった時に、借りていた楽器と自分の楽器の差をどう埋めるかという深刻な問題が出てきます。「短期間でも良い楽器に触れると自分の楽器に戻ったときも良い楽器と同じ音を出す努力をするようになります。だから、たとえ短期間でも、最高級の楽器に触れるということは演奏家にとって素晴らしい経験なのです。」とお話くださった故ドロシー・テイレイ先生（元ジュリアード音楽院教授、当財団楽器貸与委員）のお言葉を思い出します。

国籍を問わず無償で楽器を貸与

日本音楽財団がストラディヴァリウスを購入し始めた当時、「日本の財団だから日本人だけに貸すのだろう。」と言われました。貸与の事業を開始した大きな理由には、西洋各国の音楽界が日本の演奏家を非常に温かく受け入れて下さったということへの感謝の気持ちがありました。そういう訳で、最初から日本人に限らず、国籍を問わず、そのヴァイオリンの一番いい面を引き出してくれる演奏家には、どなたにでもお貸ししています。外国にも楽器を貸与しているところはありますが、例えばドイツ連邦銀行はドイツ人にしか、またオーストリア国立銀行はオーストリア人にしか貸していません。その中で、私どもは、日本人演奏家以外にもドイツ、イギリス、カナダ、ラトヴィア、デンマーク、アメリカ、アイスランド、アルメニア、ロシア等の方々にお貸ししてきました。

「世界的な遺産を、みんなで守っていきましょう。」

現存するストラディヴァリウスは、ヴァイオリンが一番多くて約600から700挺といわれ、その次にチェロが50挺、ヴィオラが一番少なく、10挺くらいしかないと言われています。その少ないヴィオラのうち、6挺はすでに既成のクアルテットに入っていますから、フリーで存在するものを入手するのはほとんど無理な状況です。日本音楽財団が楽器の購入を始めた時期は、非常

にタイミングがよかったと思います。と言うのも、戦後のコレクターの世代交代の時期と重なって
いました。コレクターの方はアマチュアプレイヤーであることが多く、楽器への思い入れがとても
強い方ばかりです。そして、その方たちにとって一番気になることは、自分の手を離れた後の楽
器の行く末がどうなるか、ということです。当財団の楽器アドバイザーであり、私たちと一緒に楽
器を集めて下さっているイギリスのアンドリュー・ヒル氏も、「日本音楽財団が楽器の保守・保全
が重要だという考えに立っているからこそ協力しているのだ。」と言ってくださいます。欧米には、「東
洋人には売らな。」というような人もいます。しかし、ヒル氏は、「世界の遺産は、これから
保存し、次の代にちゃんと引き継いでくれるところに託すのが正しいのです。」と財団の考えを評
価してくださっています。楽器をどういう形で使って、どういう形で次の世代に継承していくか、
それが一番大きな問題なのです。そのために保険をかけ、保全をし、修理もして、そして使って
頂いてというところまで考えていかないといけないのです。外国へ行くたび、私は楽器商の方にも
コレクターの方にも、「日本人が日本人のためにやっているのではない。」と説明します。「世界
的な遺産をみんなで守っていきましょう。」と。

(2014年4月)



1997年ベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクール
優勝者へのストラディヴァリウス1708年製「ハギンス」授与式
(左から：ファビオラ王妃、日本音楽財団理事長 塩見和子、
1997年コンクール優勝者ニコライ・ズナイダー、日本財団会長 笹川陽平)

**Award Ceremony of
The Queen Elisabeth International Music Competition, Belgium in 1997**
Stradivarius 1708 "Huggins" is slated to the Grand Prize winner of the competition.
(From left: Her Majesty Queen Fabiola; Ms. Kazuko Shiomi, President of Nippon Music Foundation;
Mr. Nikolaj Znaider, the Grand Prize winner of the 1997 Competition;
Mr. Yohei Sasakawa, Chairman of The Nippon Foundation)

Our Activities

Kazuko Shiomi, President

Instrument Loan Project

Mr. Yohei Sasakawa, the Chairman of The Nippon Foundation, had always felt that Japan has not yet made enough international contributions in the area of "culture" while having made significant contributions in numerous other fields. Mr. Sasakawa met with many musicians and asked them what the universal concern in the world of classical music was. The most frequent and fervent replies were that "the prices of top quality stringed instruments have become too expensive for an individual to purchase". Having heard their sincere concerns, Mr. Sasakawa proposed the "Instrument Loan Project" to Nippon Music Foundation and invited me to take on this new direction.

The "Paganini Quartet"

It was very fortunate for us to have been able to acquire a Stradivarius quartet in 1994 when we had just begun the "Instrument Loan Project". It is a dream of any stringed instrument collector to assemble a Stradivarius quartet made up of two violins, one viola and one cello. It is almost impossible to find a Stradivarius viola because Stradivari only made about a dozen violas in his lifetime. Nippon Music Foundation acquired the "Paganini Quartet" from the Corcoran Gallery of Arts in Washington, D.C. When I was informed that this quartet will be deployed for a sale, I knew instinctively that this might be the only opportunity to acquire the Stradivarius quartet during this century. So I made a quick decision to purchase this quartet. Nippon Music Foundation has now come to act as a custodian of the 20 top quality instruments (14 violins, 1 viola and 3 cellos by Stradivari and 2 violins by Guarneri del Gesu).

Instrument Loan Committee decides to whom the instruments are to be loaned

Nippon Music Foundation's Instrument Loan Committee is responsible for selecting musicians to whom the instruments are to be loaned. Led by the Chairman, Maestro Lorin Maazel, this committee is composed of 8 members representing Europe, the United States and Asia. (Please refer to page 53 for the list of members.) This Committee meets annually to discuss each candidate who applied for the loan of our instruments and also to review the activities of the current recipients. Sometimes, new applicants are asked to audition in front of the Committee. Furthermore, since 1997, the Foundation has slated the Stradivarius 1708 violin "Huggins" to the winner of The Queen Elisabeth International Music Competition in Belgium until the next competition takes place.

The Foundation hopes to assist musicians at their final "leap" stage before becoming a world class musician. The Foundation does not only loan the instruments, but also organizes concerts in order to support the growth of each player.

The Foundation assumes all maintenance and repair costs as well as the insurance

Our annual budget for the maintenance and insurance is roughly \$450,000. Some say that the maintenance cost should be borne by the players. However, we believe that we, as a foundation, should keep all the records of the repair logs for each instrument. Since we consider ourselves a custodian of the world's cultural assets, we intend to do what is best to preserve these top quality instruments.

The Foundation requires each player to take the instrument to the designated violin shops every three months for professional cleaning and check-up. We ask for the condition reports to be sent to us directly from the shops. This way, we are able to monitor the condition of each instrument. When we receive the reports from our designated shops, we know that the player is abiding by our requirements. This is the reason why we pay for all maintenance and repair, and their invoices act as the ledger for our Foundation.

The loan of the Foundation's instruments is not for a life-time

The most difficult thing is to determine when the loan should end and to ask the player to return the instrument to us. As a foundation, we are not able to loan our instruments permanently. They will need to be returned to us when the time comes. There is also a serious problem for the players to conquer the differences between the Stradivarius and their own instruments. On the other hand, the most important thing is that when the players are given the opportunity to use the top quality instrument even for a short time, they remember that superb sound and try to get the same sound out of their own instruments. Ms. Dorothy DeLay, the former professor of The Juilliard once said to me, "It is therefore very important for a player to be able to have an opportunity to play on the good instrument even for a short time". Professor DeLay, who was a member of our Instrument Loan Committee, tremendously appreciated the merit of our "Instrument Loan Project".

Policy to loan the instruments to promising artists regardless of their nationalities

When Nippon Music Foundation started to acquire Stradivarius to begin the Instrument Loan Project, people often said, "Well, Japanese foundation will probably only loan them to Japanese players". That is absolutely not the case. We began the Instrument Loan Project, because we have been grateful and wanted to express our appreciation to the classical music communities in Europe and the USA which have historically nurtured and

provided opportunities to many young musicians from Japan.

Contrary to some collectors and institutions that only loan their instruments to players of their own nationalities, we had, from the beginning, a policy to loan the instruments to promising musicians regardless of their nationalities. Nippon Music Foundation has been loaning the instruments not only to Japanese players, but also to players from Germany, England, Canada, Latvia, Denmark, the USA, Iceland, Armenia, Russia etc.

"Let's join hands in preserving the world's cultural assets"

We were very fortunate to be able to acquire top quality stringed instruments. As far as what we will be able to acquire next, we will have to see what becomes available. Stradivari has made 600-700 violins, about 50 cellos, and about a dozen violas of which, I understand, six of them are tied to quartets. All major instrument collectors certainly wish to own a viola and we would also like to own a second viola. We are grateful to be able to borrow a viola from the Royal Academy of Music in London for a number of all Stradivarius concerts where we present Mendelssohn String Octet as a highlight.

It was very timely when our Foundation began to acquire the instruments. It happened to be the time when the first generation post-war stringed instrument collectors started to release their collection. Instrument collectors are often amateur players who love the instruments dearly and their biggest concern is to find the best custodian for their beloved instruments to be placed after they leave their hands. We have more collectors who appreciated what our Foundation is doing with the instruments and the players.

Our instrument advisor, Mr. Andrew Hill, also sympathizes with this policy of our Foundation and helps us to form a superb collection of stringed instruments. Some collectors and dealers in Europe say, "Don't let the instruments go to the Far East". Mr. Hill, on the other hand, supports us because he is most concerned about entrusting these instruments to whoever could preserve and maintain for the future generations of players.

We are not trying to accumulate a big collection and boast about the number of instruments we own. We are most concerned about how to preserve the instruments to the next generation of players while having them kept in good playable condition. We do what is best for the instruments by covering them with insurance, having the condition checked regularly, carrying out necessary repairs by the most distinguished luthiers, and having them played by conscientious players. Every time I visit violin shops and collectors in Europe and the USA, I explain to them that we are not doing this only for Japan. I say to them, "Let's join hands to preserve the world's cultural assets for the future of the world's global music community".

(as of April 2014)

日本音楽財団が保有する名器

Instruments Owned by Nippon Music Foundation

Stradivarius

Paganini Quartet

- 1680 Violin "Paganini"
- 1727 Violin "Paganini"
- 1731 Viola "Paganini"
- 1736 Cello "Paganini"

Violin

- 1700 Violin "Dragonetti"
- 1702 Violin "Lord Newlands"
- 1708 Violin "Huggins"
- 1709 Violin "Engleman"
- 1710 Violin "Camposelice"
- 1714 Violin "Dolphin"
- 1715 Violin "Joachim"
- 1716 Violin "Booth"
- 1717 Violin "Sasserno"
- 1722 Violin "Jupiter"
- 1725 Violin "Wilhelmj"
- 1736 Violin "Muntz"

Cello

- 1696 Cello "Lord Aylesford"
- 1730 Cello "Feuermann"

Guarneri del Gesu

- 1736 Violin "Muntz"
- 1740 Violin "Ysaye"

ストラディヴァリウス

「バガニーニ・クアルテット」

「ドラゴネッティ」

「ロード・ニューランズ」

「ハギンス」

「エンゲルマン」

「カンボセリーチェ」

「ドルフィン」

「ヨアヒム」

「ブース」

「サセルノ」

「ジュピター」

「ウィルヘルミ」

「ムンツ」

「ロード・アイレスフォード」

「フォイアマン」

グアルネリ・テル・ジェス

「ムンツ」

「イザイ」

Stradivarius

Paganini Quartet

1680 Violin

1727 Violin

1731 Viola

1736 Cello



ストラディヴァリウス

パガニーニ・クアルテット

アントニオ・ストラディヴァリ（1644～1737）製作による楽器で構成されたクアルテットは、世界で6セットの存在が知られている。このクアルテットはその一つであり、19世紀の伝説的なヴァイオリニスト、ニコロ・パガニーニ（1782～1840）が所有していたことでも有名である。日本音楽財団は1994年にアメリカ・ワシントンD.C.のコーコラン美術館よりこのクアルテットを購入した。同美術館にこのクアルテットを寄贈した米国のアンナ・E・クラーク夫人の意志を受け継ぎ、当財団は4挺を常にセットとして四重奏団に貸与している。

Stradivarius

Paganini Quartet

This is one of the only six sets of quartet compiled with Antonio Stradivari's (1644-1737) instruments known to exist today. All the instruments of this quartet were once owned by Niccolò Paganini (1782-1840) a legendary violinist during the 19th century. Nippon Music Foundation acquired this quartet from the Corcoran Gallery of Arts in Washington, D.C. in 1994 and loans them as a set succeeding the will of Madam Anna E. Clark who donated the quartet to the Corcoran Gallery.

Stradivarius

Dragonetti

1700 Violin



ストラディヴァリウス 1700年製 ヴァイオリン

ドラゴネッティ

このヴァイオリンはネックの部分までも製作当時のものが使用されているとても貴重な楽器である。著名なコントラバス奏者ドメニコ・ドラゴネッティ（1763～1846）によって大切に所有されていたことから現在この名前と呼ばれている。日本音楽財団の購入直前には、世界的に名の知られているヴァイオリン奏者、フランク・ペーター・ツィンマーマン（1965～）によって演奏されていた。

Stradivarius 1700 Violin

Dragonetti

This violin is one of the very few instruments which still retains its original neck. Its name was taken from the owner, Domenico Dragonetti (1763-1846), the Italian virtuoso double bass player. Dragonetti formed a large collection of double basses, violins, cellos, harps and guitars. Just prior to the Foundation's acquisition, this violin was played throughout the world by the renowned violinist, Frank Peter Zimmermann (1965-).

Stradivarius

Lord Newlands

1702 Violin



ストラディヴァリウス 1702年製 ヴァイオリン

ロード・ニューランズ

イギリスのニューランズ卿（1890～1929）によって生涯大切にされていたため、現在この名前で呼ばれている。1964年から1982年にこの楽器を保管していたロンドンのヒル商会が、1973年にバースの古楽器名器展にて、当時のヒル商会を代表する楽器としてこのヴァイオリンを展示していた。楽器の保存状態が優れているだけでなく、その音質の良さでも知られており、以前このヴァイオリンを演奏したアイザック・スターン（1920～2001）は、自身が所有しているガエルネリ・デル・ジェスと同じパワーを感じると語ったという。

Stradivarius 1702 Violin

Lord Newlands

This violin was named after the owner, Lord Newlands (1890-1929), who treasured it throughout his life. While this violin was in the care of W.E. Hill & Sons of London between 1964 and 1982, it was exhibited at the CINOVA Exhibit of Bath in 1973 as the most outstanding violin in the Hill Collection. According to the world virtuoso violinist Isaac Stern (1920-2001) who once played this violin, "Lord Newlands" has the same power as his "del Gesu" violins.

Stradivarius

Huggins

1708 Violin



ストラディヴァリウス 1708年製 ヴァイオリン

ハギンス

イギリスの天文学者であるウィリアム・ハギンス卿（1824～1910）が、1880年頃ウィーンの皇帝からこの楽器を購入し、所有していたことから「ハギンス」と呼ばれている。日本音楽財団は1997年よりベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門優勝者に副賞として次のコンクールまでこの楽器を貸与し、コンクールの発展と演奏家の技術向上に寄与している。

Stradivarius 1708 Violin

Huggins

The name of this violin was taken from Sir William Huggins (1824-1910), an English astronomer who bought it from the Emperor of Austria via W.E. Hill & Sons around 1880. In 1997 Nippon Music Foundation started to loan this violin to the grand prize winner of The Queen Elisabeth International Music Competition in Belgium in order to support the Competition and the young promising players.

Stradivarius

Engleman

1709 Violin



ストラディヴァリウス 1709年製 ヴァイオリン

エンゲルマン

このヴァイオリンは、アメリカ海軍士官ヤング中佐が第二次世界大戦中に戦死するまで、約150年間ヤング家に大切に保管されていたため、保存状態が優れている。当財団が保有する以前は、アメリカのアマチュア・ヴァイオリン奏者で収集家のエフレイム・エンゲルマンが所有していたため、現在はこの名前で親しまれている。

Stradivarius 1709 Violin

Engleman

This violin was once owned by the family of a naval officer Commander Young until his death in the World War II. The Young family had retained possession of the violin for almost 150 years, which is reflected in its superior condition. Nippon Music Foundation acquired it from an American amateur violinist and collector Ephraim Engleman, hence the name "Engleman".

Stradivarius

Camposelice

1710 Violin



ストラディヴァリウス 1710年製 ヴァイオリン

カンポセリーチェ

このヴァイオリンは、1880年代にフランスのカンポセリーチェ公爵の手に渡ったことから「カンポセリーチェ」と呼ばれている。1937年にはクレモナ古楽器名器展にキューネ博士のコレクションとして展示された。日本音楽財団が購入する前は、30年間以上ベルギーのアマチュア奏者のもとで大切に保管されていたため、楽器の内側の状態はオリジナルのままである。

Stradivarius 1710 Violin

Camposelice

The name of this violin is derived from the owner, Duke of Camposelice, who was a well-known Stradivarius collector in France in the 1880s. In 1937, this violin was exhibited at the prestigious Cremona Exhibition by Dr. Kuhne who owned a collection of instruments. Nippon Music Foundation acquired it from the family of a Belgian amateur player who took great care of it for over 30 years.

Stradivarius

Dolphin

1714 Violin



ストラディヴァリウス 1714年製 ヴァイオリン

ドルフィン

1800年代後半にこの楽器を所有していたジョージ・ハートは、光沢の美しい裏板のニスが優美な“イルカ”を思わせることから「ドルフィン」という名前を付けた。音色並びに楽器の保存状態が優れており、1715年製「アラード」、1716年製「メシア」に並ぶ世界3大ストラディヴァリウスの一つと呼ばれている。また、巨匠ヤツシャ・ハイフェッツ（1901～1987）が愛用していたことでも知られている。

Stradivarius 1714 Violin

Dolphin

This violin is recognized as one of the top three violins made by Stradivari along with the 1715 "Alard" and the 1716 "Messiah". This instrument was once owned and played by the world famous virtuoso Jascha Heifetz (1901-1987). The owner in the late 1800s, George Hart who was an instrument dealer in London, named the violin "Dolphin" as its striking appearance and colour of its back reminded him of a dolphin.

Stradivarius

Joachim

1715 Violin



ストラディヴァリウス 1715年製 ヴァイオリン

ヨアヒム

この楽器は、有名なハンガリーのヴァイオリン奏者、ヨーゼフ・ヨアヒム（1831～1907）が所有していたストラディヴァリウス 1715年製ヴァイオリン5挺の内
の1挺である。また、ヨアヒムからヴァイオリンのレッスンを受けていた彼の兄
弟の孫娘アディラ・アラニに遺贈されたことから「ヨアヒム＝アラニ」という名
前でも知られている。日本音楽財団が購入するまでは、アラニ家によって代々受
け継がれてきた。

Stradivarius 1715 Violin

Joachim

This is one of the five 1715 violins once owned by the famed Hungarian
violinist, Joseph Joachim (1831-1907). This violin was later bequeathed
to Joachim's great-niece Adela d'Aranyi, who was a violinist and a pupil
of Joachim. Therefore, it is also known as "Joachim-Aranyi". It had since
remained in the Aranyi family until Nippon Music Foundation acquired it.

Stradivarius

Booth

1716 Violin



ストラディヴァリウス 1716年製 ヴァイオリン

ブース

1855年頃にイギリスのブース夫人が所有していたため、現在の名が付けられている。彼女はヴァイオリンの才能を発揮した2人の息子たちのためにストラディヴァリウスのクアルテットを形成しようと試み、この楽器を購入した。1931年にアメリカの名高いヴァイオリン奏者ミシャ・ミシャコフ（1896～1981）の手にわたり、1961年にはニューヨークのホットティンガー・コレクションの一部となった。音色の美しさ、音の力強さにおいて知名度が高く、保存状態も優れている。

Stradivarius 1716 Violin

Booth

The name “Booth” was taken from Mrs. Booth, an English lady. She purchased the violin about 1855 to form a quartet of Stradivari instruments for her two sons who showed considerable talent. In 1931, the violin was passed into the hands of Mischa Mischakoff (1896-1981), a celebrated American violinist, and in 1961, it became a part of the Hottinger Collection in New York. The violin enjoys a very good reputation for excellent quality of tone and power and good state of preservation..

Stradivarius

Sasserno

1717 Violin



ストラディヴァリウス 1717年製 ヴァイオリン

サセルノ

1845年からフランスのサセルノ伯爵が所有していたことからこの名前で呼ばれている。1894年にはヴァイオリン奏者のオットー・ペイニガーが所有し、その後イギリスで有名な醸造所を所有していたピカリング・フィップスの手に渡った。1906年にはイギリスの産業資本家ヘンリー・サマーズが所有し、それ以後90年以上にわたり同家で大切に保管されていたため、製作時のままのニスが多く残っており保存状態が非常に優れている。

Stradivarius 1717 Violin

Sasserno

The name of this violin was taken from Comte de Sasserno, a French owner in 1845. In 1894, it was acquired by a violinist Otto Peiniger, who in turn sold it to Pickering Phipps, owner of a well-known brewery in England. In 1906, this violin was passed into the hands of an English industrialist John Summers and was well-preserved in his family over 90 years.

Stradivarius

Jupiter

1722 Violin



ストラディヴァリウス 1722年製 ヴァイオリン

ジュピター

このヴァイオリンは、1800年頃にイギリスの偉大なコレクター、ジェームス・ゴディングによって「ジュピター」と名付けられたといわれている。この楽器は大切に使用されてきたため保存状態が素晴らしく、オリジナル・ニスも全体に十分残っている。近年では、日本を代表するヴァイオリン奏者の一人、五嶋みどり（1971～）が演奏していた。

Stradivarius 1722 Violin

Jupiter

This violin has been in caring hands who appreciated its quality, and therefore it is a well-preserved example of Stradivari's work. It is believed that a great English collector James Goding named it "Jupiter" in the early 1800s. For a period of time, this violin was played by the world-acclaimed Japanese violinist Midori Goto (1971-).

Stradivarius

Wilhelmj

1725 Violin



ストラディヴァリウス 1725年製 ヴァイオリン

ウィルヘルミ

1866年以降、約30年間この楽器を所有していた著名なドイツのヴァイオリン奏者、オウグスト・ウィルヘルミ（1845～1908）に因んでこの名前が付けられた。ウィルヘルミの所有していた数多くのヴァイオリンのうち最も愛用されていた楽器だったが、「演奏者として華のあるうちに引退したい」との理由で、50代の若さで楽器を手放したという。

Stradivarius 1725 Violin

Wilhelmj

The name of this violin is derived from a German violinist August Wilhelmj (1845-1908), who has possessed it for about 30 years since 1866. This violin was his most favourite among many precious violins he owned. He parted with "Wilhelmj" in his fifties, as he made the decision to "quit when at my best".

Stradivarius

Muntz

1736 Violin



ストラディヴァリウス 1736年製 ヴァイオリン

ムンツ

楽器の内側に貼られたラベルにはストラディヴァリ本人の手書きで「d'anni 92 (92歳)」と書かれている珍しい楽器である。透明な黄褐色のニスが楽器のほぼ全体に綺麗に残っており、楽器の保存状態も音色も格段に優れている。1874年以降、英国の収集家ムンツが所有していたため、「ムンツ」と呼ばれている。1737年に死去したストラディヴァリが、最晩年に製作した楽器の一つとして知られている。

Stradivarius 1736 Violin

Muntz

The label attached to this instrument bears an Italian inscription, "d'anni 92 (92 years old)", handwritten by Stradivari himself. It has a first class reputation for its excellent condition and tonal quality. This violin takes its name from a famous collector and amateur violinist, H.M.Muntz of Birmingham, England, who owned it in the late 1800s. This is one of the last instruments made by Stradivari, who passed away in 1737.

Stradivarius

Lord Aylesford

1696 Cello



ストラディヴァリウス 1696年製 チェロ

ロード・アイレスフォード

アマチュア奏者として有名であったイギリスのアイレスフォード卿が1780年代初期にイタリアの名高いヴァイオリン奏者フェリーチェ・デ・ジャルディーニ（1716～1796）から購入し、その後、アイレスフォード家に約100年間所有されていたことからこの名前が付けられた。1946年にはアメリカ・フィラデルフィア在住の世界的に著名なチェロ奏者グレゴール・ピアティゴルスキー（1903～1976）の手に渡り、1950年から1965年には巨匠ヤーノシュ・シュタルケル（1924～2013）によって演奏会や35枚のレコーディングのために使用された。

Stradivarius 1696 Cello

Lord Aylesford

This cello was once owned by a well-known amateur player, Lord Aylesford of England, hence its name "Lord Aylesford". He acquired this cello in early 1780s from the famous Italian violinist Felice de Giardini (1716-1796) and it was retained in the Aylesford family for almost 100 years. In 1946 it was passed into the hands of the world-renowned cellist Gregor Piatigorsky(1903-1976) in Philadelphia, USA. During the years between 1950 and 1965, internationally-acclaimed cellist, Janos Starker (1924-2013), played it in numerous concerts and made 35 recordings.

Stradivarius

Feuermann

1730 Cello



ストラディヴァリウス 1730年製 チェロ

フォイアマン

アントニオ・ストラディヴァリが製作したうち、現存するチェロは、約50挺といわれている。「フォイアマン」は普通のチェロと比べ、楽器本体の部分が細長い点
が特徴である。1934年から世界的に著名なチェロ奏者、エマニュエル・フォイ
アマン（1902～1942）が長年にわたり演奏活動に使用したことから、この名前
で呼ばれている。フォイアマンは斎藤秀雄が師事したこともあり、日本でもよく
知られている。

Stradivarius 1730 Cello

Feuermann

This cello is known for its relatively slim body. From 1934, it was owned
by Emmanuel Feuermann (1902-1942), one of the greatest cellists in the
world and is also well known in Japan as the teacher of Hideo Saito.
Feuermann performed throughout the world and recorded with this cello,
hence the name "Feuermann".

Guarneri del Gesu

Muntz

1736 Violin



グァルネリ・デル・ジェス 1736年製 ヴァイオリン

ムンツ

アントニオ・ストラディヴァリと並び称される名工、バルトロメオ・ジュゼッペ・グァルネリ（グァルネリ・デル・ジェス）（1698～1744）が製作したヴァイオリン。イギリスの収集家ムンツが一時期所有していたことから、この名前で親しまれている。日本音楽財団はストラディヴァリとデル・ジェスによって同じ1736年に製作された2挺の「ムンツ」を保有しており、それぞれの楽器の音色の特色を聴き比べるために、両方の楽器を使用したコンサートを開催している。

Guarneri del Gesu 1736 Violin

Muntz

This violin was made by Bartolomeo Giuseppe Guarneri (1698-1744), a distinguished violinmaker comparable to Stradivari. This violin is known as "Muntz" from its ownership by the same Muntz family as the 1736 Stradivarius violin. Nippon Music Foundation owns two "Muntz" violins both made in 1736 and holds duo recitals to compare the sounds of the two instruments.

Guarneri del Gesu

Ysaye

1740 Violin



ガルネリ・デル・ジェス 1740年製 ヴァイオリン

イザイ

この楽器はベルギーの国家的ヴァイオリン奏者、ウジェーヌ・イザイ（1858～1931）が所有していたことからこの名前が付けられた。楽器の中には小さなラベルが貼られ、赤いインクで「このデル・ジェスは私の生涯を通じて忠実なパートナーだった。イザイ 1928」とフランス語で書かれている。イザイの国葬の際には、クッションに載せられ棺と共に行進した名器としても知られ、その後、1965年に巨匠アイザック・スターン（1920～2001）の所有となり生涯愛用された。この楽器は日本音楽財団が1998年に、スターンから譲り受けたものである。

Guarneri del Gesu 1740 Violin

Ysaye

This violin bears the name "Ysaye" from the Belgian violinist Eugene Ysaye (1858-1931). Inside the violin is an inscription written in French with red ink, "This Del Gesu was the faithful companion of my career. Ysaye 1928". The violin took part in the procession of Ysaye's state funeral being carried on a pillow in front of the virtuoso's coffin. From 1965, it was owned by the world-virtuoso violinist Isaac Stern (1920-2001) from whom Nippon Music Foundation acquired it in 1998.

Stradivarius

Lady Blunt

1721 Violin

この楽器は、2011年6月、オークション史上最高額で落札され、日本音楽財団は東日本大震災復興支援のため、全額を日本財団の災害基金に寄付した。

This violin was sold for a world record price at auction in June 2011. Nippon Music Foundation donated all proceeds to The Nippon Foundation's Northeastern Japan Earthquake and Tsunami Relief Fund to support their relief efforts.



Photo by Tarisio

ストラディヴァリウス 1721年製 ヴァイオリン

レディ・ブラント

イギリスの詩人ロード・バイロンの孫娘レディアン・ブラントが所有していたことからこの名前が付けられた。1716年製ヴァイオリン「メシア」、1690年製テナーヴィオラ「タスカン」と同様に保存状態は極めて優れており、ストラディヴァリの楽器製作の原型であると評価されている。現在楽器に付いているバスバーと指板は、パリの著名な弦楽器製作者ジャン・バプティスト・ヴィヨーム（1798～1875）によるものだが、オリジナルは現在も楽器と一緒に保管されている。装飾の施された糸巻きとテールピースもヴィヨームの作である。

日本音楽財団は2008年より「レディ・ブラント」を保有してきたが、2011年3月に発生した東日本大震災の復興を支援することを目的として当楽器の売却を決定した。インターネットオークションを利用して広く告知した結果、オークションで扱われる楽器としては史上最高値の875万ポンドで落札され、日本音楽財団は全額を日本財団の災害基金に寄付した。

Stradivarius 1721 Violin

Lady Blunt

Once owned by Lady Anne Blunt, the granddaughter of the English poet Lord Byron, this violin bears her name. The "Lady Blunt" deserves to rank with the "Messiah" 1716 violin and the "Tuscan" 1690 tenor viola for its outstanding freshness of preservation, and it is highly acclaimed as the finest example of the Stradivarius instrument making. The bass-bar and fingerboard were replaced by Jean-Baptiste Vuillaume (1798-1875), the renowned luthier in Paris, but the originals still remain with the instrument. It also bears the ornamented pegs and tailpiece made by Vuillaume. Nippon Music Foundation had kept and preserved "Lady Blunt" since 2008, but decided to put it on auction to support the relief efforts of the March 2011 Northeastern Japan Earthquake. Widely advertised through internet, the bidding price set the highest auction record as a musical instrument at 8,750,000 pounds. Nippon Music Foundation donated all proceeds to The Nippon Foundation's Northeastern Japan Earthquake and Tsunami Relief Fund.

楽器貸与委員会

当財団の楽器貸与に係わる基本方針の策定並びに貸与先の決定は、楽器貸与委員会が行います。委員会は、欧・米・アジアの代表により下記のとおり構成されています。

委員長	ロリン・マゼール	指揮者
	マルタ・カザルス・イストミン	マンハッタン音楽院元学長
	アナ・チュマチェンコ	ヴァイオリニスト、ミュンヘン音楽大学教授
	チョン・キョンファ	ヴァイオリニスト、ジュリアード音楽院教授
	海老澤 敏	尚美学園大学大学院特別専任教授
	ジャン・ピエール・デ・ラオノア	ベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクール会長
	カーティス・プライス	オックスフォード大学ニュー・カレッジ学長
	塩見 和子	日本音楽財団理事長
名誉委員		
	ドロシー・テイレイ	元ジュリアード音楽院教授
	ヤーノシュ・シュタルケル	チェリスト、元インディアナ大学音楽学部教授
	吉田 貴壽	元昭和音楽大学学長

(2014年4月現在)

Instrument Loan Committee

The Instrument Loan Committee is responsible for making basic policies regarding the loan of the instruments owned by Nippon Music Foundation and for selecting performers to whom the instruments are to be loaned. The Committee is composed of members representing Europe, the United States and Asia.



Lorin Maazel, Chairman	Conductor
Marta Casals Istomin	Former President of Manhattan School of Music
Ana Chumachenco	Violinist, Prof. at the University of Music and Performing Arts Munich
Kyung-Wha Chung	Violinist, Prof. at The Juilliard School
Bin Ebisawa	Prof. at Graduate School of SHOBI University
Comte Jean-Pierre de Launoit	Chairman of the Queen Elisabeth International Music Competition, Belgium
Sir Curtis Price	Warden of New College, Oxford
Kazuko Shiomi	President of Nippon Music Foundation

Past Members

Dorothy DeLay	Former Prof. at The Juilliard School
Janos Starker	Cellist, Former Prof. at the Indiana University Music Department
Takatoshi Yoshida	Former President of the Showa Music Conservatory

(as of April 2014)

保有楽器と貸与者

Instruments and Recipients

Stradivarius

Paganini Quartet

1680 Violin "Paganini"	Hagen Quartet	
1727 Violin "Paganini"	Rainer Schmidt	Germany
1731 Viola "Paganini"	Lukas Hagen	Austria
1736 Cello "Paganini"	Veronika Hagen	Austria
	Clemens Hagen	Austria

Violin

1700 Violin "Dragonetti"	Veronika Eberle	Germany
1702 Violin "Lord Newlands"	Ray Chen	Australia
1708 Violin "Huggins"	Andrey Baranov	Russia
1709 Violin "Engleman"	Vilde Frang	Norway
1710 Violin "Camposelice"	Svetlin Roussev	Bulgaria/France
1714 Violin "Dolphin"	Akiko Suwanai	Japan
1715 Violin "Joachim"		
1716 Violin "Booth"	Arabella Miho Steinbacher	Germany
1717 Violin "Sasserno"	Alina Pogostkina	Germany
1722 Violin "Jupiter"	Ryu Goto	USA
1725 Violin "Wilhelmj"	Reiko Watanabe	Japan
1736 Violin "Muntz"	Yuki Manuela Janke	Germany

Cello

1696 Cello "Lord Aylesford"	Pablo Ferrández	Spain
1730 Cello "Feuermann"	Danjulo Ishizaka	Japan

Guarneri del Gesu

1736 Violin "Muntz"		
1740 Violin "Ysaye"	Sergey Khachatryan	Armenia

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 Tel 03-6229-5566 Fax 03-6229-5570
Akasaka 1-2-2, Minato-ku, Tokyo 107-0052 Japan
Tel 81-3-6229-5566 Fax 81-3-6229-5570 <http://www.nmf.or.jp> info@nmf.or.jp

As of April 2014

主催：読売新聞社 特別協力：日本音楽財団 協力：日本財団
後援：社会福祉法人 読売光と愛の事業団